

況もしくは対象を象徴するだけではない。そのような状況や対象の存在あるいは出現を可能にする。というのは、言語はそのような状況や対象がつくりだされるメカニズムの一部分だからである。社会過程は、ある個体の反応を他の個体の身振りの意味として、結びつける。このように社会過程を基盤として、社会状況のなかに新しい対象が生まれる。対象はこのような意味に依存している、あるいはそれによって構成されている。(Mead, 1934, p. 78)

こうして意味の三項関係による定義が細み出される。

このような身振り、それに対する適応的反應、およびその身振りからはじまる社会的動作の結果という三重の、あるいは三対の関係こそが意味の基盤である。というのは、意味の存在は、第二の生物体の適応的反應が、第一の生物体の身振りによってひきおこされ、そして指示される一定の社会的動作の結果に向かって方向づけられるという事実に依存しているからである。意味の基礎は、このように、社会的行為の内部に客観的に存在している。あるいはその性質として、そのような行為との関係のなかにある。(Mead, 1934, p. 80)

さて、ミードの活動についての理論づけには、四つの基本的要素があるといえよう。個人、他者、シンボル、対象、である。興味深い問題は、シンボルの起源である。ミードによれば、シンボルは身振りから生まれる。

原初的な状況は社会的活動のそれであつて、さまざまな形態の相互作用を含むので、社会的過程を進めるときにそれらのさまざまな形の行為が互いに調整されることになる。この過程に私たちが言うところの身振りがあり、それは、他の形態の反応の調整をする活動の側面である。(…)

音声的身振りは(…)それを発した人にとつて、それを向けられた人、あるいはそれに特に反応した人に対するのと同じ効果をもつとき、意味あるシンボルとなり、したがつてそれを発した人の自己への旨及を含むことになる。身振り一般、とくに音声的身振りは、社会的行動の場におけるある対象や他者、その場の社会的活動にかかわるすべての人に共通の関心対象を指示し、その対象に向けられている。社会的活動のいかんにかかわらず、身振りの機能は、その活動がかかわる対象(単数あるいは複数)にかんして、関連する人々あいだの調整を可能な限り行うことである。そして意味ある身振りやシンボルは、そうでないものよりも、そうした調整と再調整をずっとうまく促進することができる(…)(Mead, 1934, p. 45-46)

しかしそれでは、身振りはどこから生じるのだろうか。ミードにとつて身振りは、人間行動にも動物行動にも与えられている原初的なものである。しかしながら、意味ある意識的な身振りは、人間だけに見いだされる(Mead, 1934, p. 81)。ただし、こうした意味ある意識的な身振りがどのようにして生起するかは、説明されていない。

この点について考えるとき、ミードの概念とレオンチェフやチャン・デユク・タオの概念を比較するとおもしろい。レオンチェフもタオも、対象の構成的な性格についてはミードに同意している。し

かし、その構成をたんにコミュニケーションやシンボル化として解釈する点については、ミードに同意していない。彼らにとつて対象の構成は、何といつても、ツールを手段として感覚的・物質的に構成すること、すなわち生産なのである。コミュニケーションやシンボル化は、生産と有機的に結びついてはいるが、あくまで生産の一側面として派生的に生み出されると見なされている。

レオンチエフによれば、意識的な身振りは、作業の動きが何らかの理由で実際の結果につながらないときでも、それを経験するときに生まれ、生産に加わつた他者に影響を与えうる、という。たとえば、それは所与の活動を満たすこともできる。

こうして、対応する作業の動きを保つてはいるが対象との実際のな接触がなく、そのために対象を現実の作業の動きのなかに変換することもない類いの動きが生じた。こうした動きは、それに付随する音声とともに、対象に働きかけるという課題からも労働活動からも引き離されて、ただ人々に働きかけるという機能、話し言葉によるインターコースの機能だけをもつ。言いかえれば、それらは身振りに変換されたのである。身振りは、その結果から引き離された動き、それが目指す対象には適用されない動きに他ならない。(Leontiev, 1981, p. 219)

チャン・デユク・タオは、この考え方をさらに洗練させている。彼は、言語の前身を前人 (pre-hominid) の指示記号 (indicative sign) に見ている。

(…) 前人が発展していくそもその初めから、指示の信号を意識化していくなかで、原初的な循環的身振りが直線的なたちへと変化した可能性がきわめて高い。さらに、集団作業の興奮から直線的な指示の身振りが一瞬持続し、前人は必然的に、動いているその対象を追う。たとえば、逃げたり倒れこむ獲物、くちばしや短刀のように野獣に突き刺さる骨片や木片。このようにして展開される身振り信号は、それに伴って発せられる音声によって強化される。それは情動に発するものであるが、身振りの投げかける指向的イメージと結びつき、客観的意味をもつ画としての価値をもつに至る。「遠ざかっている、ひっくりかえっている、貫いている」というかたちの運動をしている「これ」など。(…) そのように意味内容が伝達されることによって、たんに集団の力を「このこれ」として指示される対象に集中するよりも、はるかに高い集団的労働の調整が可能となることは明らかである。(Tran Duc Thao, 1984, p. 56)

レオンチェフもチャン・デュク・タオも、身振りと、ツールを媒介としたモノとしての対象への労働とのあいだの発生的な結びつきを強調している。彼らの出発点は、活動の道具的側面とコミュニケーション的側面がそもそも結びついているということである。それゆえ、記号とシンボルは、必然的に相互作用的・コミュニケーション的なかたちをもつ、労働活動から派生した道具と見なされる。ミードにとって、最初の状況とは、相互作用の状況、社会的状況であって、モノとしての対象は二次的・抽象的に存在しているだけである。彼にとってシンボルは本来、対象へのツール媒介的手続きを習得するための手段ではない。

シンボルとは、それへの反応が前もって与えられている刺激にほかならない。私たちのいうシンボルの意味は、これがすべてである。単語があり、殴られたとする。その打撃は、歴史的にはその単語に先立つ。しかしもしもその単語が侮辱の意味だったとしたら、反応は今やその単語に含まれていたもの、ほかならぬその刺激自身のなかで与えられていた何かだ、ということになる。「シンボル」の意味するものは、これがすべてである。さて、その反応が、行動をのちのちまでコントロールするのに利用できる態度というかたちで与えられるなら、その刺激と態度との関係こそ、私たちの言う「有意味シンボル」である。(Mead, 1934, p. 181)

行為のコントロールは、ここでは、人々のあいだの相互作用のコントロールである。道具によって働きかけられ、有用なアーティファクトへ形づくられるための対象は、偶発的な役割を演じているにすぎない。

ミードも、モノの生産について論じてはいる。実際、「精神・自我・社会」(Mead, 1934, pp. 248-249; p. 363)の終わり近くで、この問題がとりあげられている。彼は、人間の動作には、「動作の実際の完成と開始とのあいだに生じる、この用具的段階が含まれている」(Mead, 1934, p. 248)と指摘する。人間の手は基本的なツールであり、モノを生産する手段である。ミードは次のように記すことで、人間の手のもつ認知的な重要性を評価している。「動作の開始と終わりを仲立ちする人間の手による接触は、多種多様なやり方で多種多様な刺激を与える。そして手による接触は、何らかの障害や妨害が生じたときに、その行為をやりとげ、みずからを表現したいという、別の衝動を引き出すので

ある」(Mead, 1934, p. 363)。

しかし、道具についての思考の流れは、ミードの研究のなかでは、多かれ少なかれ、わき道に位置する。活動のコミュニケーション的側面と道具的側面は、統一した体系を形づくってはいない。両者の相互関係に、それとわかるようには答えていない。

ミード学者でその研究遺産の擁護者でもあるハンス・ヨアスは、シンボル媒介的な相互作用の理論について、重要な留保を付けている。「ミードの行為概念は、適応的なインターコースのモデルをあまりに指向しすぎており、客観化や新しいモノの生産をあまりに指向していない」(Joas, 1980, p. 231)。この評価は共感しやすいが、しかしながら、「あまりにしすぎ」とか「あまりにしていない」ということが問題なのではない。欠落しているのは、二者間のダイナミックな相互関係である。ミードの考えは、幼児のコミュニケーション発達についての最近の研究のなかにも再び現れている(Lock, 1978; Bullowa, 1979)。この線に沿ったもつとも独創的な試みのひとつは、コールウィン・トレヴァーセンの「乳児における二次的間主観性」に関する研究である。トレヴァーセンによれば、人間のコミュニケーションにおいては、話し言葉が始まるよりかなり以前の生後40週くらいで根本的な質的变化が生じる。

生後9ヶ月頃の新しい行動にみられるもつとも重要な特徴は、(…) 周りにある熟知した物理的現実への興味と、人々に向けられたコミュニケーション行為(Doing)とを、乳児が体系的に結合するようになることである。最初に達成されるのは、事象やモノについての経験を共有するようにと求めることである。

これ以前には、対象は知覚され使用されるものであり、他方、人々はコミュニケーションするものであつて、この二種類の意図は別個に表現されている。9カ月未満の幼児は、みずから他者と共有するが、モノについての知識や意図を他者と共有することはない。(Trevathan & Hubley, 1978, p. 184)

トレヴァーセンらは、「いったん、行為のコミュニケーションの様式と実践の様式のあいだの自由な相互作用が達成されるや、すぐさま乳児は、人間に独自の行動を完全なたちで示すようになる」(Trevathan & Hubley, 1978, pp. 213-214)と云う。この二次的間主観性の形成は、「母親と乳児と、モノをその重要性において等しい水準で」結合する(Trevathan & Hubley, 1978, pp. 214; 強調は引用者による)。このことは、一連の図で示されている(図2・2)。ハリデー(Halliday, 1975)とネルソン(Nelson, 1979)も、社会的領域とモノ領域の協調を個体発生のもとと後期に位置づけてはいるものの、同様の線に沿った分析を行っている。

一次的間主観性から二次的間主観性への移行がゲームを通じて起こることを、トレヴァーセンは詳細に記述している。トレヴァーセンの研究成果は、ミードに欠落していたもの、すなわち活動のコミュニケーションの側面と道具的側面の関係をきちんと取り上げているようにみえる。しかし、そう言えるだろうか。トレヴァーセンは行為の実践的な様相(praxic mode)については語っているが、道具的な様相については語っていない。実のところ彼は、道具やツールを、それが使われる対象と本質的に異なつてしかも本来的に関連しているものとしてきちんとした考察をしていない。この点

一次の間主観性



二次の間主観性



図2・2 一次の間主観性と二次の間主観性の例
(Trevarthen & Hubley, 1978, p. 215)

一次の間主観性：(A) コミュニケーション：赤ちゃんが母親と面と向かって相互作用している；対象には興味を示さない。

(B) モノへ働きかける：赤ちゃんが働きかけ、母親は見ている。

二次の間主観性：(A) 赤ちゃんがモノを与え、それが受け入れられたとき喜びを示す。

(B) 全面的な人-人-モノの流ちょうさ、たとえば、母親が、いかに課題 (1+2) を解くか示す。赤ちゃんは受け入れ (3+4)、そこで母親を見、両方が喜ぶ (5+6)

で、トレヴァーセンの二次的間主観性のモデルは、間主観性についてのミードの考えと変わるところがない。

しかしながら、ミードが本質的と考えながらトレヴァーセンのモデルには組み込まれていない要素がある。シンボルである。シンボルはミードにとって、相互作用の普遍的あるいは公的な次元を代表している。すでにみたように、シンボルは、モノの生産にかかわる道具や手続きからは分離されているが、しかし、社会的かつ歴史的なものであることは確かである。この社会・歴史的側面が、トレヴァーセンのモデルから失われているのだ。

ジョン・R・モース (Moss, 1985) が最近示した「新ミード派」の基本仮説への批判は、以上の背景をふまえてみたとき興味深い。モースによれば、新ミード派は、ミードの理論を根本的に誤って解釈している。

ミードは、集団的な価値の人格化としての「一般化された他者」をきわめて強調している。しかしこれは、かなり抽象的な存在であることを強調しておかねばならない。社会的意味は、初期の役割遊びにみられるように特定の他者に結びつけられているのではない。一般化された他者とは、実際に一般的他者である。したがって、ミードの関心は、コミュニティとの関係におかれた個人にあるのであって、特定の個人ではない。新ミード派は、二者間の (dyadic) の相互作用一般、特に母子の二者関係を強調することによって、ミードから完全に逸脱している。(…) 新ミード派は、「社会的」と「間人間的 (interpersonal)」を等置することに(そしてまた、「間人間的」の「二者間的」への還元にも) 何の疑問

ももっていないようにみえる。(Morss, 1985, p. 168)。

モースは、この還元が本来のミードの知識観とは対照的な知識観へ導くと論じる。ミードにとって、知識の社会的性格とは、知識が何といつても公的で、非個人的であることを意味していた。新ミード派の人々にとって、知識の社会的性格とは、知識が間人的であることを意味している。

つまり知識は、他者と接触できるだけの理解力のある個人を必要としているというふうに解釈できるのである。この意味で、人間間主義 (interpersonalism) とは、たんなる個人主義 (personalism) の精緻化、いかなれば、多元的な個人主義といえる。(Morss, 1985, p. 171; Shotter, 1986 ㊦ Morss, 1986 のあいだで起きた論争も参照のこと)

このことは、新ミード派が、ミード理論の真に社会的・公的な次元を暗黙のうちに追い払って、新しいかたちの個人主義 (individualism) と私事主義 (privatism) に陥ってしまったことを意味している。

パースからポパーへの第一の潮流が、活動を知識の個人的構成として見なす考え方をもたらしたとするならば、第二の潮流は何を提供したのだろうか。ミードは明らかにその像を拡大し、社会的・相互作用的・シンボル媒介的な現実の構成を提示してみせた。しかし、この構成は依然として、実践的なモノの構成ではなく、頭のなかでの構成 (construction-for-the-mind) と考えられていた。

4 「第三の思潮——ヴィゴツキーからレオンチエフへ

1930年に、ソビエト心理学の文化・歴史学派の創始者、L・S・ヴィゴツキーは、媒介 (mediation) についての考え方を次のようにスケッチしている。

行動の基本的な形態はすべて、有機体の前におかれた課題への直接的反応を前提としている（簡単な S-R 公式で表現できる）。しかし記号操作の構造は、刺激と反応のあいだに間接的な連関を必要としている。この間接的なリンクは、操作のなかに引き入れられる二次的な刺激（記号）であり、そこで特殊な機能を果たしている。それは、S と R のあいだに新しい関係を生み出す。「引き入れられる」というのは、個人はそのようなリンクを確立することに積極的にかかわらねばならないということを示す。記号もまた、逆向きの行為 (reverse action)（つまり、環境でなく人に操作する）という重要な特徴をもっている。

したがって、簡単な刺激-反応過程は、複雑な媒介された行為に置き換えられる。それは次のように図示できる。

この新しい過程においては、反応への直接的な衝動は制止され、間接的な手段によって操作の完了を促進する補助的な刺激が組み入れられる。

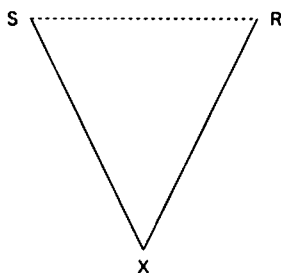


図 2・3 媒介された行為の構造
(Vygotsky, 1978, p. 40)

注意深くなされたいいくつかの研究が証明しているところでは、このタイプの組織化は、上で示したものよりもずっと洗練されているが、あらゆる高次心理過程にとつての基本である。この公式における媒介リンク (intermediate link) は、たんにその前にあった操作を改善する方法ではないし、S-R連鎖にただ付け加えられただけのリンクでもない。なぜなら、この補助的刺激は、逆向きの行為という特殊な機能をもっているために、心理的操作をより高次な、質的に新しい形態へと転化するとともに、人間が、外部からの刺激の助けをかりて外部から自分の行動をコントロールすることを可能にするからである。記号の使用によって、人間は、生物学的発達から離脱し、文化に基礎づけられた新しいかたちの心理的過程を創造する独自の行動の構造へと導かれるのである。

(Vygotsky, 1978, pp. 39-40)

ヴィゴツキーは、人間活動にみられる媒介的道具を、相互に関連する二つのタイプ、つまりツールと記号に区別した。後者は「心理的ツール」という、より広いカテゴリーに属し

ている。

ツールは、活動の対象に対して、人間の影響を及ぼすものとして機能する。言い換えれば、ツールの機能は、外的に方向づけられている。対象に変化をもたらさなければならぬのである。ツールは、自然を征服し、勝利することを目的とした人間の外的活動の手段である。(Vygotksy, 1978, p. 55)

心理的ツールはこれとは異なる性質をもっている。

技術的手段が自然のさまざまな過程をコントロールすることに向けられているのと同じように、それらは、誰か他の人の、あるいは自分自身の行動過程を習得しコントロールすることに向けられている。

心理的ツールは複雑なシステムであって、例としては次のようなものをあげることができよう。言語、さまざまな計数システム、記憶術、数シンボルのシステム、芸術作品、文字、略図・図解・地図・製図、あらゆる種類の様式的記号、などなど。(Vygotksy, 1981, p. 137)

技術的ツールも心理的ツールも、活動を媒介している。しかし、心理的ツールのみが、反省的媒介、つまり自分の(あるいは他者の)手続きについての意識を含意し、また必要としている。ヴィゴツキー(1978, p. 54)は、これら二つのタイプの道具を並行的なもの、つまり媒介された活動の「同じカテゴリーの下に包摂されるもの」としている。しかし、同じテキストの少し後では、両者の関係を

階層的に特徴づけている。

人工的手段の使用、媒介された活動への移行は、あらゆる心理的操作を根本的に変える。それはちょうどツールの使用が、新しい心理的機能が働く活動の範囲を、限りなく広げると同じである。この文脈において私たちは、高次心理機能、あるいは高次行動という用語を心理的活動におけるツールと記号の組合せを指すものとして使うことができる。(Vygotsky, 1978, p. 55)

この階層的な特徴づけは重要である。実際、私の解釈では、媒介の二つのレベルを区別することができる。媒介の第一のレベルは、ツールと身振りによる媒介が互いに切り離されている(身振りがまだ真の心理的ツールではない段階)。媒介の第二のレベルは、対応する記号や他の心理的ツールと組み合わされたツールによる媒介である。新しいツールの獲得と適用は、影響の範囲を広げるが、新しい心理的ツールの獲得と適用は、影響のレベルを引き上げるのである(ただし、これは可能性として話である。結果が実際に達成されるのは、ツールと心理的ツールが互いにうまく合ったときだけである)。

心理的ツールの本質は、それが技術的ツール(人間の手も含む)を使い、作るという手続きを、協働的に、コミュニケーションを通じて、自覚的に形づくり、コントロールするための道具に発するということである。この当初の機能は、前人における発達した指示的身振りと最初の表象の出現に関するチャン・デック・タオ(Duc Thao, 1984)の分析に、十分に示されている。分離していた身振り

と技術的ツール（Ⅱ第一の道具）との結合による心理的ツール（Ⅱ第二の道具）の形成こそが、ミードのいう「有意味な身振り」、「有意味なシンボル」の出現であり、また、トレヴァーセンのいう「第二の間主観性」の出現であると私は主張したい。

第一の道具と第二の道具というアイデアは、マルクス・ヴァルトフスキーによって明確に表現されている。

(…) 人間に特有な行為の形態を構成しているのは、アーティファクトを、生存手段の生産と種の再生産におけるツールとして創造し使用することである。第一のアーティファクトとは、この生産において直接使われるアーティファクトである。第二のアーティファクトとは、この生産を實行するために必要な技能、あるいは行為や実践 (Praxis) の様式を保持・伝達する際に使われるアーティファクトである。したがって、第二のアーティファクトとは、そうした行為の様式の表象であり、またこの意味において、模倣 (mimetic) である。それは、たんに、この生産において興味をひき有効であるような環境の対象についての模倣であるだけでなく、働きかけられるものとしての対象の模倣であり、またそうした対象をまさきこんで行われる操作あるいは行為の様式の模倣でもある。したがって、表象の基準 (canons) は、さまざまな形式の行為や実践の変化・進化に対応する慣習的要素を多くもっており、そのため、「自然な」外見や類似性といった単純な観念には還元できないものなのである。この過程のなかで、自然、あるいは世界は、そうした表象の媒介によって、私たちの世界 (world-for-us) になる (…)。 (Wartofsky, 1979, p. 202)

ヴァルトフスキーは、第二のアーティファクトを「反省的な具体化」と呼んでいる。その様式は、身振り、音声あるいは視覚だが、「明らかに、複数の感覚モダリティにおいてコミュニケーションされるものである」(Wartofsky, 1979, p. 202) と彼は指摘する。これらの表象は、「心的なものとして、頭のなかに、存在するのではない」。それは「外的に具体化された表象」なのである (Wartofsky, 1979, p. 202; Keiler & Schurig, 1978, pp. 146-147 も参照)。

私にとって、ヴァルトフスキーの第二のアーティファクトとヴィゴツキーの心理的ツールとは、本質的に同じものである。ヴィゴツキーの主知主義的偏向 (Leontiev & Luria, 1968, pp. 354-355) は、記号や語の意味のやや一面的な強調につながっている。心理的ツールのより広いカテゴリーは、技術的ツールと心理的ツールの興味深い関係がそうであったように、ヴィゴツキーの手で具体的に精緻化されたわけではなかった。皮肉なことだが、ヴィゴツキー以後のソビエト心理学の活動志向的アプローチは、記号と心理的ツール一般の問題を無視することによってヴィゴツキーの主知主義を拭い去ろうとした。「記号の問題に関するヴィゴツキーの具体的研究についての議論が、必要でまた当然あつてしかるべきものだったとすれば、この問題を取り除くことは、原理的に、活動の理論の実質的な矮小化につながったにすぎない」(Davydov & Radzikhovskii, 1985, p. 60)。ヴィゴツキー研究の近年の復興において、記号は再び、心理的ツールの領域や第一のツールとの関係から引き離され、「それ自身として」扱われすぎている。この危険は、ヴィゴツキーの記号的媒介に関するワーチの分析 (Wertsch, 1985b) のような傑出した分析にさえも、忍び込んでいるように思われる。

ヴィゴツキーによれば、道具的に媒介された行為は、「要素的な単位にもとづく研究によって扱わ

れている、行動のもっとも単純な部分」(Vygotsky, 1981, p. 140)である。他方、V・P・ジンチェンコ(Zinchenko, 1985, p. 100)が論証しているように、ウイゴツキーは、具体的な研究、とくに「思考と言語[ことば]」において、別の基本的な分析単位——すなわち、語義(meaning)あるいは語の意味(word meaning)という単位——を使っている。

V・P・ジンチェンコは、「語義のなかには意識への変換のための、動機となる力(motive force)がないので、自足した分析単位として受け入れることはできない」(Zinchenko, 1985, p. 100)と論じている。語義のなかに固定されているのは、思考の認知的側面のみである。情意的・意志的側面は、説明されないままなのだ。

そこで彼は、適切な単位はツール媒介的行為だと提案しているが、これは実のところ、ウイゴツキーの道具的行為と同じものである。さらに、V・P・ジンチェンコが正しく述べているとおり、「ツール媒介的行為を、分析単位としての語義に非常に近いものとして考えることができる」。なぜなら、「ツール媒介的行為は、必然的に、対象の語義とカテゴリー的な語義の両者を生み出す」(Zinchenko, 1985, p. 103)からである。

しかし、V・P・ジンチェンコは、ツール媒介的行為という彼の提案した単位が、どうやって語義の単位のなかに内在する限界を克服するのかについてはきちんと論証できなかった。ツール媒介的行為は、決して、動機づけ、情動、創造といった問題を解決しない。対照的に、語義とツール媒介的行為は、同じ構造的レベルを構成しているようにみえる。これは、目標指向的な個人の認知のレベルであり、人間の機能の「合理的なレベル」である。動機づけ、情動、創造といった問題は、このレベル

では解答不能であるようにみえる。これらの問題は、より高次で集合的な、そして——逆説的なのだが——意識されにくい機能レベルに属するのである。この線に沿った分析の矢は、ヴィゴツキーによる高次心理機能の概念の主張のなかに放たれている。しかし、ヴィゴツキーの概念把握のこの階層的側面は、V・P・ジンチェンコによつては展開されていない。

実をいえば、P・I・ジンチェンコ（V・P・ジンチェンコの父）は、1939年の論文でこの問題に接近していた。ヴィゴツキーの道具的行為のアイデアについての批判的なレビューのなかに、やや曖昧ではあるが次のようなくだりがある。

しかし、ヴィゴツキーの思考においては、手段とその対象との関係は、主体と現実——実際の、すべての内容を含んでとらえられた現実——との関係から分離されていた。厳密な意味でいえば、手段と対象との関係は、心理学的な関係というより、論理的な関係である。しかし、社会発達の歴史は、文化発達の歴史に還元できない。（…）文化発達の歴史は、社会の社会的・経済的発達の歴史に含められなければならない。つまり、文化の起源と発達を決定づける特定の社会的・経済的関係の文脈で考察しなければならぬ。（Zinchenko, 1983-84, p. 70）

この個別の行為を超えた機能レベルの問題は、もつとも思慮深い認知主義的分析にもみられるが、それは魅惑的な謎のようなかたちにすぎない。こうして、V・P・ジンチェンコは、「解放された行為」(liberated action) という概念をとりあげて論文を締めくくっている。

飛行機事故の防止に携わる専門家によると、複雑な飛行条件の下では、人間と機械は、いわば時間の外にあることがわかつている（ここでは、意識的にコントロールされた決定や行為の「時間」を念頭においている）。大事故を避けようとするための潜在的な能力をもたらずのは、まさにこの事実である。しかしこの潜在的な能力の起源はどこにあるのか。あるいは、こうした場合には、最小限、時間の二重読み——実際の状況的な時間と活動それ自体の空間の中に流れている状況を超えた時間——を仮定せねばならないのだろうか。そして、それらの調整もまた仮定せねばならないのだろうか。しかし、それは誰によつて調整されるのか。この調整作用に責任をもつ主体はいるのだろうか。

ここで明白な前提は、自己コントロールの主体の消滅である（すなわち、個人的な「私」を状況から分離することであり、したがって、対象の時間だけでなく主体の時間からも分離することである）。このことが意味しているのは、「私」は「時間の外」にあるということである。この種の「遮断」が、遂行される行為についての自己反省の可能性に影響することはないだろう。しかし主体は、行為の実現をプランしたりコントロールしたりはしない。にもかかわらず、記憶のなかに行為をつなぎとめることができるのは、主体が自分自身を超えたところで観察を行っているからである。

事実、そのような状況で私たちが出会っているのは、解放された行為もしくは解かれた (unloosed) 行為である。古の人々が言つたように、解放された人間は間違いを犯さない。(…)

主体にとつて重大な状況でみられる、この解放された行為の非時間性は、創造、残虐行為、発見といった行為にみられる非時間性と似ている。これらすべてにおいて必須な条件は、主体の自由あるいは解放であり、厳格な主体性の放棄である。(Zinchenko, 1985, pp. 112-114)

ジンチェンコの議論は、ユングの集合精神の概念を思い起こさせる。サー・フレデリック・バートレット (Bartlett, 1941) が、飛行における極限状況という同じ例を使って、機能の上位水準という同じ問題をとりあげたのも、たんなる一致以上のものがある。ジンチェンコは、個人の行為遂行が予期以上のものになる例を論じているが、バートレットは、ブロードベントによって報告されているように、個人の行為遂行が劇的に悪化する場合を論じた。

(三) ケンブリッジの実験室では、飛行する英国空軍パイロットの技能低下をシミュレーター上で観察してきた。課題は、周辺の職務を果たしながら、高度、コース、飛行速度をコントロールすることであった。課題の一部分を単独で持続的に遂行するのであれば効率の低下はみられないが、課題のすべての部分を同時に遂行するときにはかなりの低下が生じる、ということを示すデータをバートレットは引用している。したがって、この低下は単一のレベルの過負荷に起因するのではない。彼が言うように、「正確さや力が失われたのは、局地的な反応ではない。知らないうちに、だが確実に、関心の払われない領域 (indifference range) の範囲を拡げていったのは、中枢コントロールの方である」。一個一個の独立した課題ではなく、その組み合わせ方が問題なのだ。意識的な言語報告は、関与するレベルのひとつだけからしか行われないと彼は述べる。パイロットは自分の技能が悪化していることにまったく気づかず、どんな明らかなエラーも実験者や機器のせいにして非難することがしばしばあった、と彼は論じている。(Broadbent, 1977, p. 183)